

## 巻 頭 言

小林俊行（東京大学）

昨今、著名な数学者の還暦や退官を記念した行事が多い。私自身、海外だけでも十何件かの記念集会で講演を行った。分野は解析から幾何、代数までさまざまである。こういうときは、その先生の切り拓いた分野を「お題」として思い浮かべ、自分にしかできない研究と結び付けて、後進からのお祝いの一つとなるように努めている。準備には膨大な時間が必要になるが、主役の先生にとっては一生に一度のことなので、招いていただいた側としても、心をこめて講演の準備をしたいという気持ちになるのである。時間を惜しまずに、学び、考え、試行錯誤しているうちに、温故知新の喜びもあり、また予期せぬ発見のきっかけをつかむこともある。1つの講演は多くの出会いの場でもある。

こんな話題を持ち出したのも数学通信の編集部から、「高木レクチャー」と「ジャパニーズ・ジャーナル(JJM)」の創設の経緯をテーマとして巻頭言を書いてほしいとの要請があったからである。5年前、存続が絶望的となった旧 JJM の再建を任された私は起死回生のスキーム作りに取り組んでいた。再建のためには、最初に設計図を大きく描くことが重要である。これに加えて「新しい形」に「どのような魂を入れるか」が勝負所と考え、それに心を砕いた。めでたく 2006 年の春に発刊できた新生 JJM には「研究総説リサーチサマリーに特化した学術誌」という形に「(単なる総説ではなく)創造を引き起こすエネルギー」という魂を求め、同年の秋に創設した高木レクチャーでは「第一線で活躍している数学者による連続講演」という形に加えて「講演者が意気を感じて、とびきりの話をしてくださる環境を作る」という無形のものに力を入れた。

とてつもない大きな波が押し寄せてきて、古き良きシステムが翻弄されることがある。こういう場面に出くわしたとき、無力感の中でいたずらに時間が過ぎてゆくことが多いのではないだろうか？ 高い理想を掲げて新しい魂を注入し、多くの人が力を合わせることによって、「とてつもなく大きな波」にのみこまれずに生き残った例は、いつか別の所で何かの参考になるかもしれない。新生 JJM も高木レクチャーも創設後 3 年余りを経過したことであり、少し長くなるが、編集部の要望に沿ってその当時の話を書いてみることにする。

旧 JJM の危機は 2004 年に表面化した。グローバル化の波が学術誌の世界にも押し寄せてから既に数年以上が経過していた。利用者側からみると論文を検索するのも投稿や査読を行うのも大幅に便利になった反面、ジャーナルを発信する母体は国際的な弱肉強食の世界に放り込まれていた。

旧 JJM はさらに遡ること 80 年前、大正時代に日本学術会議（当時の学術研究会議）が発

刊し、第二次世界大戦後は長編の大論文を日本から海外に発信する場にもなった。一方、世界中で、若いエネルギーに満ちたジャーナルが次々に生まれており、何もしなければ既存のものの相対的な地位は低下する。この自然の摂理にグローバル化の波と図書館の予算削減とが拍車をかけた。海外の図書館が旧 JJM の購読を打ち切り、30 年間にわたって編集・制作・出版でお世話になっていた紀伊國屋書店から撤退を通告された。一方、旧 JJM のシステムは特殊であり、主体的に査読を行う編集体制が存在していなかった。こうして、2004 年に旧 JJM は廃刊の危機に直面した。

全国の大学の紀要の代表者会議（旧 JJM の論文の供給源としての母体）では、旧 JJM の将来に否定的な意見が相次いだ。日本数学会の当時の理事長の森田康夫氏は、過去の理事長経験者と数名の関係者をあつめて緊急の特別委員会を組織し、JJM の存続の可能性を模索した。特別委員会では検討を重ねれば重ねるほど、廃刊止む無し、の流れが濃厚になった。とうとう司会の森田康夫理事長は、「小林君にはすまないが、JJM は小林君が再生を引き受けてくれなかったら、廃刊するしかないと私は考えています」としめくくられた。

寝耳に水の話であった。当時、私は日本数学会のもう 1 つの欧文ジャーナルである JMSJ 編集長の 2 期目であった。こちらのジャーナルでは変革の目標がほぼ実現でき、編集長の重責からようやく解放されることになっていた。仙人のように数学だけに没頭できる、と楽しみに思っていた矢先である。とても引き受けられないというのが本音であった。

一方、大正時代から続いていた先人たちの努力が潰えてしまうのを傍観するのも辛かった。再生のために残された期間は 1 年しかない。これをすぎると、たとえ新しい体制ができたとしても海外の図書館との継続契約が途切れてしまう。事態はそこまで追い詰められていたのである。誰かがやらなければならない。

とうとう私は引き受ける覚悟をきめた。こうして、JJM の蘇生という無謀な方向に舵がきられた。時間との戦いでもある。大きな設計図づくり、それに賛同する出版社探しと交渉、新編集委員会の結成、国内外の図書館への連絡、ロケット・スタートのためのアイデア、電子版の出版準備、創刊号の寄稿依頼、と待ったなしの課題が山積みであった。新しい事務スタッフも必要である。幸い、約 6,000 部を年に 4 回発行する JMSJ の編集長をつとめている間に、出版経費の大幅削減に成功していた。これで半恒常的な財源が生まれたと考えられるので、その財源を原資として JJM 担当の秘書を雇用することを提案した。理事長は賛同して迅速に行動して下さった。日本から再び世界に良いものを発信するために、やらなければならないことは山ほどあった。

再生のスキームづくりの中で、「失ってしまうと取り返しのつかないことはないだろうか？」と自問してみた。酸素のように無くてはならないものは、ふだんは存在していることさえ気づかないものである。ましてや根本的に変革するときには、新しい事業に目を奪われがちになってしまう。こういうときこそ、当たり前すぎて意識してこなかった「大事なもの」を失わないように気をつけなければいけない。私は JJM の無形の価値を再検討し、「1924 年以来、とだえることなく出版されてきた日本最古の数学の欧文誌」という歴史、

先人たちが大事にしてきた「ジャパニーズ・ジャーナル」という名称，数が減ったとはいえ購読を続けている図書館との信頼関係の3つを，かけがえのない財産であると判断した。これらの無形のものを守り，それ以外は大胆に変えることで，再生をはかるのは筋が通っているだろうと考えた。

JJM 新シリーズの新基軸は，「優れた研究総説論文に特化する」ということに決めた。エネルギーを集中させて，創刊号にびっくりするほどの高い質の研究総説論文を出版し，新 JJM が目指しているものを明らかにする必要がある。そこで小野薫，河東泰之，斎藤毅，中島啓という，その研究時間を削ることは人類の損失になるような数学者に，JJM の蘇生を一緒に助けてもらうようお願いした。彼らは，意気を感じて加わってくれた。

私を含めた5人の新エディターが原稿集めに奔走した。

「沈没しかけた船の船長をなぜ引き受けたのか？」と尋ねられて「沈ませないため」と私が答えると，それならばひと肌脱ごうと約束して下さり，200 ページ近い長編を書き下ろして下さったのはドイツのネーブ先生である。

このようにして，数は多くないけれども世界の各地で著名な先生方が新 JJM のためにと，執筆を開始して下さった。最初の寄稿はロシアのアーノルド先生から届いた。この論文には後日談もある。その論文に掲載された主予想については，思いがけずセール先生（当時79歳）から私信があり，最終的にヴィンバーグ先生が完全に解決された（この論文も後に JJM に掲載された）。2番めにご寄稿くださったのは，なんと当時99歳の彌永昌吉先生だった。この後，ネクラソフやコンツェビッチ等，30代から40代の気鋭の数学者も JJM に寄稿して下さることになるが，90代での御執筆はそれ自身が感動的である。彌永先生は96歳のときに完成されながら未発表としておられた，とっておきの研究総説論文をご寄稿くださったのである。その論文は，フランス語で60ページもあった。彌永先生の長編の論文は，私には天の助けに思われた。その論文が彌永先生のご生涯の最後の発表論文となったが，彌永先生のご生涯最初の論文も JJM で出版されていたことを後に知り，不思議なご縁を感じた。JJM の草創期の論文をみていると，1924年の創刊号には高木貞治先生の論文が掲載されている。高木貞治先生もまた JJM の門出を支えておられたのであろう。私には，高木貞治先生や彌永昌吉先生が，JJM がピンチになると，みえないところから助けにきてくださっているような心もちがした。記念すべき新 JJM の創刊号（電子版）の出版日は彌永先生の100歳の御誕生日に合わせることにした。

寄稿して下さる著者だけでなく，査読して下さる先生方も JJM の存続の危機を知って獅子奮迅の活躍をして下さった。査読は，とても時間がかかり，しかも，誰の目にもつかない地道な仕事である。一方，素晴らしい業績をあげられている数学者には，このつらい仕事を快く引き受けて下さるという方が多い。このことに関して，柏原正樹先生の2008年の巻頭言には，はたと膝を打った。エディターをしていると陰徳を積んでいる人に出会うことが多い。

著者から査読者へ、そして学会の編集スタッフから出版社の制作へ、と良いものを作ろうという気迫のバトンが受け継がれた。旧 JJM は 2005 年をもって既に終了していた。そして 2006 年の春に奇跡がおこった。わずか 1 年の準備期間で、新 JJM の創刊号が出版できたのである。途切れずに出版するという JJM の伝統と歴史は守られた。再生のシンボルとして J, J, M の 3 文字で富士山をかたどったロゴや紙バッグの記念グッズをデザインしてみた。表紙を新たにした創刊号は 2006 年 3 月の年会でお披露目された。

ロケット・スタートに成功したあとは、悪循環ならぬ「良循環」（良いものが次の良いものを生み出す）ができるような中期計画が必要である。ジャーナルの命は、何といたっても良い論文を投稿していただくことであり、著者にそのような動機を持ってもらうための信頼関係と環境づくりが大事である。しかし、JJM の目指す「新しい創造を引き起こすエネルギーを内包する研究総説」を執筆することは、口で言うほど容易なことではない。

そこで新 JJM の原稿の供給源は単一ではなく、3 本柱にするのが良いだろうと考えた。1 つ目は門戸を広く誰からの投稿も受け付けること、2 つ目は招待原稿、3 つ目は「高木レクチャー」の創設である。高木レクチャーでは、講演当日に配布する原稿を事前に書いていただく。この原稿は、後に新 JJM に掲載される研究総説の第一稿の役割を兼ねる。もちろん、JJM ではいずれの投稿に対しても査読をきちんと行うのである。

高木レクチャーでは第一線の数学者を招聘する。彼らは当然のごとく非常に忙しい。それでも、とびきりの講演をしていただきたい。主催者として最大限に力を注いでいるのはその先生方が、どうしたら意気を感じてくださるか、ということである。心のこもった講演をしていただくためには、まずこちらが心を砕かねばならない。新 JJM の創刊の年(2006 年)に、高木貞治先生のお名前を冠する講演会「高木レクチャー」の設立提案を行ったのにはこういう背景があった。「数学の発展に日本が貢献するシンボル」としてお名前を用いることを高木先生の遺族の方にご了承いただいた。高木レクチャーでは講演当日に配布する予稿集の表紙に北斎の浮世絵を使っている。富士山をモチーフとしたロゴや JJM の表紙でも、一貫して同じ気持ちがこめられている。すなわち、オリジナルなもの、美しいものを大事にして日本から良いものを発信しようという魂である。この魂こそが、高木レクチャーの講演者をもてなす気持ちであり、また新 JJM の基本精神でもある。

JJM の蘇生では、日本の数学の伝統とそれを支える人々の底力を感じた。困難に立ち向かっているとき、それに手を差し伸べて下さる多くの善意と友情があった。個人ではたち向かえないほどの大きな波が襲ってきたとき、中途半端に妥協するのではなく、毅然として、理想を高く掲げ続けることができよかったですと思う。

今年は高木先生の没後 50 年にあたる。写真でお見受けする表情は厳かであるが、今を生きる日本の数学者たちも前向きに努力しているのを見て、天国で微笑んで下さっているような気がしてならない。